

古ジャワ文学におけるクリシュナ

安 藤 充

はじめに

古ジャワ文学は、宗教としてのヒンドゥー教のみならず、それに密接に関連した政治社会体制、芸術など、広義のヒンドゥー文化を積極的に受容したジャワにおいて、9世紀以降、宮廷文学として華開き、15世紀から顕著になったジャワのイスラム化以後はバリにおいてその命脈を保った。

古ジャワ文学の大抵の作品はサンスクリットの二大叙事詩あるいはその他の名高いプラーナ伝承に取材をしている。概して物語の大枠は原典に忠実であるが、韻文作品における詩的要素の過剰なまでの挿入はいうまでもなく、いわゆるジャワ的な翻案のありようは、往時の宮廷を中心にしたヒンドゥー教の受容形態の特色を反映しているとみることができよう。

ジャワやバリにおけるインド由来の信仰は、シヴァ教と仏教（密教）が混淆したようなものである、と一般に言われる。他方、インドではシヴァと双璧ともいえる人気のヴィシュヌ神やその化身であるクリシュナに関しては、古ジャワ文学でも多くの物語が作り出されている割には、信仰や崇拝の対象としては、「最高神」として崇められることの多いシヴァの影に隠れてしまったかのごとくである（Gonda 1972:47）。

小論では、まず、古ジャワ文学におけるクリシュナ物語を概観し、インド原典との比較によるジャワ（あるいはバリ）の特徴をとらえ、さらに作品成立にまつわる歴史的背景をおさえながら、これまで看過されがちであった、ジャワ、バリにおけるクリシュナ＝ヴィシュヌ信仰について、その一面を窺ってみたい。

1 古ジャワ文学におけるクリシュナ物語

古ジャワ文学は、サンスクリット叙事詩の各巻を古ジャワ語散文で翻案した作品パルワ（parwa）と、同様の題材をインド由来の韻律でうたう詩作品カカウィン（kakawin）に大別される。

現存するパルワは10種あり、写本の奥付けの記述などから年代を推定すると、以下のような3つのグループに分けられる (Zoetmulder 1974:95-98)。

- ・ Wirāṭaparwa (991-996 A.D.)
- ・ Ādiparwa, Bhiṣmarwa, Uttarakāṇḍa, Udyogaparwa (991-1016)
- ・ Sabhāparwa, Āśramawāsaparwa, Mosalaparwa, Prasthānikaparwa, Swargarohanarwa

これらのうち、ラーマヤナ最終巻に基づく Uttarakāṇḍa 以外は、マハーバータの対応する名の巻に依拠している。

クリシュナに関連するのは、Ādi, Wirāṭa, Udyoga, Bhiṣma, Āśramawāsa, Mosala の各パルワである。ここでは一々指摘しないが、いずれもサンスクリット・マハーバータの物語を簡略に抄訳しているものの、クリシュナの描き方は大筋において原典に忠実である。この点、成立年代のちがいによるパルワ間の差異は特にみられない。

次に、カカウィンについて、まず、クリシュナが登場してある程度の役割を演じる作品は、次のようなものである。参考までに、そのカカウィン詩人が依拠したと思われるサンスクリット・古ジャワの原典、あるいは同種の内容をもっているテキストを併記する。

タイトル	主要な筋	典拠、同類の物語の所在
Bhāratayuddha	Pāṇḍawa と Korawa の大戦争	Udyogaparwa ~ *Sauptikaparwa
Bhomakāwya	Sāmba と Yajñāwatī の物語, Bhoma 殺戮	cf. Daśakumāracarita, Avantisundarikathāsāra
Ghaṭotkacāśraya	Abhimanyu と Kṣītisundari の恋	
Hariwaṁśa	Jarāsandha 殺戮, Rukmiṇī 略奪	cf. Harivaṁśa, Viṣṇupurāṇa, Bhāgavatapurāṇa
Kṛṣṇāyana	Jarāsandha 殺戮, Rukmiṇī 略奪	cf. Harivaṁśa, Viṣṇupurāṇa, Bhāgavatapurāṇa
Kṛṣṇāntaka	Kṛṣṇa の昇天	Āśramawāsa-, Mosala-, Prasthānikaparwa
Kṛṣṇakālāntaka	Kālāntaka 殺戮	cf. Udyogaparwa
Kṛṣṇāndhaka	Kaṁsa 殺戮	cf. Harivaṁśa, Viṣṇupurāṇa, Bhāgavatapurāṇa
Kṛṣṇawijaya	Kālayawana 殺戮	cf. Kṛṣṇāyana, Subhadrāwīwāha

物語の梗概は Zoetmulder (1974) に譲り、典拠についての補足的な説明をしておきたい。Bhāratayuddha はマハーバーラタの Udyoga から Sauptika までの巻にあたるバラタ戦争を描いたものであるが、サンスクリット原典を直接に下敷きにしたのではなく、現在では失われてしまったものも含めて、古ジャワ語のバルワをもとにしてカカウィンに仕立てたものと考えられている (Supomo in print)。Hariwaṁśa と Kṛṣṇāyana はおそらく同じサンスクリット伝承にもとづいているが、前者の方がより自由かつ文学的にすぐれた翻案とみられている (Zoetmulder 1974:289)。Kṛṣṇāntaka はマハーバーラタの 15-17 巻をもとにしたバルワをさらにカカウィンに翻案した作品である。また、Kṛṣṇāndhaka の描くクリシュナの誕生および青年期のカンサ王殺戮の物語は、他の古ジャワ文学品には同様の例をまったくみない一方、プランバナン寺院の浮彫に類似した場面が見いだされることに注目される (Bernet Kempers 1959:62, Soewito-Santoso 1986:18-23)。Ghaṭotkacāśraya はサンスクリット文献にも古ジャワ語文献にも類話が未だ比定されていない。

ここでは、それぞれの作品の典拠についてさらに深く立ち入ることはしないが、カカウィンにおけるクリシュナ物語は主に、Harivaṁśa やブラーナの伝承と、それをもとにしたカカウィンからの取材、そしてマハーバーラタに依拠したバルワからの取材によって成り立っているということができよう。

次に、このようなカカウィンのクリシュナ物語を、彼の誕生～昇天までの生涯という観点でとらえると、以下のようにまとめられよう。

誕生 (化身)

Viṣṇu の化身として、悪魔や悪王を討伐するために誕生—Hariwaṁśa, Bhomakāwya,
Kṛṣṇāyana, Kṛṣṇawijaya,
Kṛṣṇāndhaka

Kaṁsa 王の命による新生児殺害を免れて誕生—Kṛṣṇāndhaka

結婚

Rukmiṇī の略奪—Hariwaṁśa, Kṛṣṇāyana

戦い

Kaṁsa 王殺戮—Kṛṣṇāndhaka

Kālayawana 殺戮—Kṛṣṇawijaya

Jarāsandha 殺戮—Hariwaṁśa, Kṛṣṇāyana

Naraka (Bhoma) 殺戮—Bhomakāwya

Kālāntaka 殺戮—Kṛṣṇakālāntaka

Pāṇḍawa と Korawa の戦い—Bhārata-yuddha

Yadu 一族の内乱—Kṛṣṇāntaka

昇天

Jarā の矢による致命傷—Kṛṣṇāntaka

Viṣṇu の姿にもどり昇天—Bhāratayuddha, Hariwaṁśa, Kṛṣṇāyana, Kṛṣṇawijaya

カカウィンにおけるこのようなクリシュナの描かれ方を、サンスクリット文学、特に最初の表でも指摘した2つのプラーナやマハーバータと巨視的に比較して気づくのは次のような点である。

・ヴィシュヌの化身としてこの世の救済のために誕生 (降下)、この前提に沿って悪王や悪魔を討伐したのちにふたたびヴィシュヌとして天界にもどる、というエピソードがいくつかのカカウィンに共通している。

・場面設定やそこにいたるまでのストーリーはさまざまではあるものの、クリシュナ何らかのかたち (悪魔退治、悪王討伐、バラタ戦争など) で戦いに関わり活躍する。

・上の2点が、インドのクリシュナ伝承にくらべて圧倒的に数少ない古ジャワ文学の中でも比較的共通しているクリシュナの特徴であるのに対し、いわゆるクリシュナの幼小期のいたずら、青年期の恋物語など、インドの伝承では有名なエピソードでも全くといっていいほど関心が払われていないものがある。

2 宮廷文学としての古ジャワ文学とクリシュナ=ヴィシュヌ

このような、古ジャワ文学におけるクリシュナの描かれかたについてはさまざまな要因があろうが、ここでひとつ着目したいのは、古ジャワ文学が宮廷詩人による宮廷文学であったということである。

カカウィンでは初期のいくつかの作品をのぞき、普通マンガラ (maṅgala) と呼ばれる序詞、すなわち、これから歌い上げる詩が首尾よく成就するように守護神 (iṣṭadewatā) に祈り、またパトロンたる王をたたえる一節が最初にもうけられている。また結末部にも詩人の名や王の名が記されていることがしばしばある。例えば、東部ジャワ・クディリ朝のジャヤバヤ王 (1135-57 在位) の要請で作られた Bhāratayuddha と Hariwaṁśa では明らかにこの王がヴィシュヌの化身と称えられている。

Bhāratayuddha 52.4 (text: Supomo in print)

「これ (カリ期のジャワが善王なく疲弊している) を見てヴィシュヌ神は心痛め、憐れみの心をおこした。そこでこの世に降下して王となり、王国の再建に努めた。かつて彼はクリシュナと呼ばれ、戦での勝利をおさめた。そしていまジャヤバヤ王として、

世界に名声が鳴り響いている。」

Hariwaṇśa 1.2 (text: Teeuw 1950)

「これから語るのは、ほかならぬヴィシュヌ神の賛歌、優美なカカウィン詩にして書板のはしくれに表わそうと思う。成功するなぞのぞむべくもないが、王のたつてのご命令とあらばこそ。ダルメーシュワラ、ジャヤバヤ王は世界の覇者、なぜなら ヴィシュヌの化身と生まれたゆえに。」

ただし Bhāratayuddha は前半と後半が別々の詩人で書かれ、前半の詩人スダ (Sēdah) はマンガラ (1.7) でシヴァへの帰依をうたっている。しかしながら、ジャヤバヤ王自身が特にヴィシュヌを信奉していたことは、彼の埋葬地と思われるところから、王を模したと推定されるヴィシュヌ像が発見されたことから也确实視できる (Bernet Kempers 1959:70-71)。

また、同王朝のジャヤクリタ王 (1194-1205? 在位) は, Ghaṭotacāśraya のマンガラでケーシャヴァの化身とうたわれている。

Ghaṭotkacāśraya 1.3 (text: Zoetmulder 1974:Appendix IV)

「ジャヤクリタ王は類なき主、まさにケーシャヴァ神である。かつてクリシュナと知られた彼は、世界が滅亡し創造主ブラジャーパティのわざの結実が無となるのを憂い、ふたたび世界の守護者となったのである。ルドラ神が世界の帰滅を志したときに、いったい憐れみ深い彼なくして、この世の完全な破滅を免れることがありえようか。」

古ジャワ語ではケーシャヴァはクリシュナのみならずヴィシュヌを意味することもあり (OJED), 文脈からも王がヴィシュヌの化身と称えられていることが明らかである。

ジャヤバヤ王以降のクディリ朝の王とヴィシュヌ神との深い関わりをさらに強く感じさせるのは、下にまとめたように、ヴィシュヌの化身を意味する異名が刻文などに発見されることである (Zoetmulder 1974:273;277)。

王	在位年代	王の異名の一例
Jayabhaya	1135-57	Madhusūḍhanāwatāra
Sarweśwara	1159-61	Janārdhanāwatāra
Āryeśwara	1174?	Madhusūḍhanāwatāra
Kāmeśwara	1182?-85	Triwikramāwatāra
Kṛtajaya	1194-1205?	Triwikramāwatāra

(=Jayakṛta, Jayawaṛṣa)

このように、クディリ朝の王たちは自らをヴィシュヌの化身となぞらえているが、ここには、ヴィシュヌの化身としてこの世に現われ武勇にすぐれた王、英雄

として悪を討つ、というクリシュナのイメージが強く反映されている。ジャワの王たちは、おそらく、善にして強なる王＝クリシュナ＝ヴィシュヌの化身という枠組みにふさわしい物語を、ある程度意図的に宮廷詩人たちに翻案させたのであろうと推測される。とすれば、幼少期、青年期の悪戯、恋物語など、インドでは有名な、人間味あふれるクリシュナの描写が古ジャワ文学では圧倒的に少ないこともうなづけよう。

カカウィンの場合は寓意、つまり、インド由来の物語の翻案という形をとりながらジャワ王家に関わる歴史的事実を暗に歌うという手法がとられたことがいくつかの作品について指摘されている (Robson 1983)。宮廷詩人が作品のテーマを選ぶ背景には王の志向、信仰や政治的配慮などが大いに影響しても驚くにはあたらない。

小論では詳しく取り上げないが、もう一人の有名なヴィシュヌの化身であるラーマが最古のカカウィンとして9世紀に書かれ、その後もジャワやバリにおいていろいろな翻案作品、浮彫、さらには影絵芝居などとして人口に膾炙していることも、クリシュナ＝ヴィシュヌの場合と無関係ではないといえるかもしれない。

3 クリシュナ物語とヴィシュヌ信仰

このように、クディリ朝の王らがヴィシュヌを信奉していたことは明らかだが、当時あらゆる階層においてヴィシュヌ信仰が主流であったとは考えがたい。Bhāratayuddha の前半部分の作者がシヴァを守護神としていることは既に述べたが、クディリ朝期のカカウィンにおいてすら、物語のなかでヴィシュヌ信仰の様子が読み取れるような記述は加えられていない。

この傾向は後代になると特に顕著で、Kṛṣṇāntaka, Kṛṣṇawijaya, Kṛṣṇakalāntaka などの一般にバリの成立と目されている作品では、クリシュナの名を題名に冠し、ヴィシュヌの化身としてのクリシュナという枠組みは残しながらも、作品のパトロンとしての王との関わりはもはや明示されず、マンガラでシヴァをたたえたり、さらには本文中にシヴァ信仰を思わせるような場面を増広してさえている (安藤 1991:82-83)。

このように、少なくとも古ジャワ文学の観点からすれば、マジャパイト期、そしてその影響を多分にうけたバリにおいては、クリシュナは、いわばルネサンスとしての古ジャワ文学という文学活動の枠内の、ひとりの有名な登場人物と化していったかのようである。

おわりに

古ジャワ文学, 特に東部ジャワ期において, インド由来の英雄クリシュナの武勇の物語が好まれた背景には, 王がヴィシュヌの化身クリシュナにアイデンティティを求めた, という状況があったのであろう。しかしながら, 日常の祭祀・供養や特別な儀式など, 宗教的な側面において, 王のヴィシュヌ信奉がどのように反映されていたか, という点については, パルワやカカウインは何も具体的な情報をもたらさない。何よりもまず, 東部ジャワ期の歴史や宗教事情については未だ不明な点が多いのが難点である。

ただ, 今日のバリのヒンドゥー教においても, ヴィシュヌはとくにクシャトリヤ階級と強い結びつきをもち, 例えばクシャトリヤの関わる儀礼においてはシヴァの化身としてのヴィシュヌの名が唱えられたり, 悪魔祓いや戦勝のためにナラシンハ (=ヴィシュヌ) を称えたりするようであり (Goudriaan and Hooykaas 1971), 王とヴィシュヌの密接な関連は依然として失われていないといえる。また, クリシュナの青年期の「リーラー」に言及する Stuti が現存しない (Gonda 1972:51) ことも, 古ジャワ文学と呼応していて興味深い。

References

- Bernet Kempers, A.J.: *Ancient Indonesian Art*, Amsterdam, 1959.
 Gonda, J.: 'Some Notes on the Worship of Viṣṇu, in: P. Ratnam ed.: *Indo-Asian Art and Culture*, vol. I, New Delhi, 1972, pp. 47-54.
 Goudriaan, T. and C. Hooykaas: *Stuti and Stava*, Amsterdam, 1971.
 Robson, S.: 'Kakawin Reconsidered', *BKI* 139 (1983), pp. 291-329.
 Soewito-Santoso: *Kṛṣṇāyana*, New Delhi, 1986.
 Supomo, S: *Bhāratayuddha*, in print.
 Teeuw, A: *Hariwaṇśa*, 2vols., The Hague, 1950.
 Zoetmulder, P.J.: *Kalangwan*, The Hague, 1974.
 idem: *Old Javanese-English Dictionary*, 's-Gravenhage, 1982 (OJED).
 安藤 充「古ジャワ語詩『クリシュナアンタカ』について」宗教研究 290 号 (1991), pp. 67-94.

〈キーワード〉 古ジャワ文学, クリシュナ, ヴィシュヌ

(愛知学院大学講師, Ph.D.)